

稱讃二〇二号

二〇一九年一〇月一日発行

発行 浄土真宗本願寺派 稱讃寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三―五二四二―二〇二五

FAX 〇三―五二四二―二〇二六

H P shousanji.com

二〇一九年度 稱讃寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讃寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

二〇一九(令和元)年九月二十二日
稱讃寺 秋季彼岸会法要

すなはちみづから思念すらく、
「われいま
回らばまた死せん、住まらばまた死せん、
去かばまた死せん。一種として死を勉れざ
れば、われ寧くこの道を尋ねて前に向かひ
て去かん。すでにこの道あり、かならず
可度すべし」と。

この念をなすとき、東の岸にたちまちに人
の勧むる声を聞く、
「きみただ決定してこ
の道を尋ねて行け。かならず死の難なけ
ん。もし住まらばすなはち死せん」と。ま
た西の岸の上に、人ありて喚びひていは
く、
「なんぢ一心に正念にしてただちに来
れ、われよくなんぢを護らん。すべて水火
の難に墮せんことを畏れざれ」と。

『教行信証(信巻)、『注釈版聖典』二三四頁



旅人は、貪欲・瞋恚の水火の二河に差し掛かると、彼岸に渡る幅十五センチぐらいの白い道があるのに気づきます。引き返しても、南北の川沿いに逃げても、そこに止まっても、またこの白い道を渡っても水火の波に呑み込まれてしまう。所謂「三定死」(絶対に死を免れない)状態に心身が置かれています。

そういう時、旅人は自らこの白い道を進もうと決心します。既にこの道があるではないかと。そう思ったと同時に、こちらからお釈迦さまの「この道を行け」との呼声が聞こえ、彼岸から「安心して来なさい」との阿弥陀さまの呼び声が聞こえてきた。旅人は一歩二歩その白い道を歩むと、此岸から「戻ってこい」との誘惑の声にも振り返ることなく、お念仏を称え、とうとう、阿弥陀さまの元へ往ききるのです。

旅人は、私自身のことだろうか？ 絶体絶命の時、既にこの道があるからと言って、渡る決心が私にあるだろうか？ 上図の赤丸の中には旅人に手を合わす方が描かれています。それこそが私では？

秋季彼岸会法要



去る九月二十二日（土）、稱讃寺の秋季彼岸会の法要を執り行いました。午後二時から「おつとめ」の予定でありましたが、午後一時からの門徒総代会が長引きまして、二時四〇分ぐらいからの「おつとめ」になりました。

お彼岸を控えた十七日に、川上さんから

お供物やその台、経机等を頂いておりましたので、お飾りさせていただきました。紫・黄・ピンク・緑と色鮮やかなお荘厳で、お彼岸法要をお迎えすることが出来ました。

当日は良いお天気に恵まれました。

野口明美さん、川田原末廣さん・正明さん親子、中木原乃既子さん、福井恒彰さん、早崎光弘さん、高橋八重子さんの七名がご参拝いただきました。

「おつとめ」は皆さんで『仏説観無量寿經』をおつとめいたし、『浄土真宗のみ教え』の「お彼岸」を拝読した後、仏教讃歌の「みほとけは」を歌いました。

法話は、住職でつとめさせていただきました、「二河白道」についてお話させていただきました。

了祥師の三幅の「二河白道」図をコピーして、三つ折りの厚紙に貼り、今回の記念品にしました。

それをご覧いただきながら、二河白道の譬えを解説させていただきました。

お話の後は、川田原さんから頂いたお萩を食しながら団らんして、午後五時過ぎ解散いたしました。各々、車でお出での方に分乗して送ってもらいました。自転車でお出での高橋さんには、最期、後片付けまでしていただき、ありがとうございました。

皆さま、ようこそのご参拝でございました。



第一幅 絶体絶命の状況

第一幅で描かれるのは、西を目指して歩む旅人が群賊や悪獣に襲われ、行く手を火や水の河に遮られてしまう場面です。



旅人―行者

東岸の広野を西に向かう旅人は、浄土を目指す行者です。この段階で行者は他力の信心を得ておらず、本図ではそれを衣装の色で表現しています。信心を得た行者を描く第二幅の白道上の旅人が白色の衣装と裸足であるのに対し、本図では衣装を白と赤、靴を白と黒に描いています。白一色でなく裸足でないのは、「若存若亡」（ある時は往生できると思い、ある時はできないと思う）（『注釈版聖典』高僧和讃曇鸞讃587頁）という自力疑心の特徴を表わしています。この旅人は西に向かって合掌していますが、それは「間違はなく往生させていたかく」という安心感のない、不安な心のまま阿弥陀仏へ救いを求めている姿であるのです。

そしてこの自力の行者は、後ろから群賊悪獣に襲われ、前方には水火二河に挟まれたわず

か15センチばかりのとても渡れそうにない細い道があるだけ、という状況に陥っています。「引き返しても死、とどまっても死、進んでも死」というこの絶望的な状況は「三定死」と言われています。

西岸―極楽宝国

旅人が目指す西岸は阿弥陀仏の西方浄土を表わします。本図では、第二幅の光明で表わされた浄土とは異なり、楽しみに満ちた夢幻的な世界に描かれ、行者がまだ自力疑心の行者であり、他力信心を得ていないことが表現されています。中国の曇鸞大師は「もし人が他力の信心をおこさずに、浄土で楽しみを食うためだけに往生を願うのであれば、往生できない」（『注釈版聖典』信文類・菩提心積247頁）と説かれています。ここでのポイントは、楽しみを求めるか否かではなく、（凡夫は楽しみを求めてしまうものだから）、あくまで他力信心をおこすか否かということにあります。本図の浄土は、まさにこの他力信心をおこしていない行者が願う浄土を描いたと言えるでしょう。

水の河と火の河―貪愛・瞋恚

東岸をゆく旅人の前に突然現れた水の河と火の河は、根本的な煩惱とされる「三毒」（貪欲・瞋恚・愚痴）の「貪欲」（むさぼり・我欲）と「瞋恚」（怒りや憎しみ）を表わしています。ここに「愚痴」はでていませんが、すべ

てのものを自分中心的に見る愚痴の心は、自らに都合のいい状況（順境）では貪欲となり、都合の悪い状況（逆境）では瞋恚となって現れるため、「水火二河」によって三毒が表現されていると考えられます。

群賊・悪獣―六根・六識・六塵・五陰・四大

旅人を殺そうと迫る武器を手にした群賊や恐ろしい悪獣は、「六根・六識・六塵・五陰・四大」を表わしています。「六根」は感覚器官（眼・耳・鼻・舌・身・意）であり、六根を通してはたらく認識作用が「六識」（眼識・耳識・鼻識・舌識・身識・意識）、その六識の認識対象となるものが「六境」（色・声・香・味・触・法）です。五陰（五蘊）とは、人の心身を構成する五つの要素（色（物質）・受（感受作用）・想（表象作用）・行（意思作用）・識（認識作用））、「四大」とはあらゆる物質を構成する四つの要素（地・水・火・風）です。要するに「群賊・悪獣」とは、煩惱を生じさせる私たちの「心と肉体」を意味します。私たちの求道を妨げ迷いの世界につなぎとめるもの、それは私たち自身であるのです。

東岸―娑婆の火宅

旅人がゆく東岸は私たちが生きるこの迷いの世界です。その広野の道のりが「百千里」であるのは、流転輪廻が果てしないこと、「無人」であるのは、聖道門や自力の教えを伝える

人に会い、他力念仏の教えを伝える善き人（善知識）に出会っていないことを表わしています。

第二幅 白道をゆく

第二幅では、西を目指す旅人が、東岸と西岸の声にしたがい、群賊の呼びかけにも振り向かず、水火二河の間の白道を一心に進む場面が描かれています。



白道―清浄願往生心、願力の道

二河の間にのびる白道は、「信心」と「本願力」を表わします。白道が二つの意味を持つのは、浄土真宗の信心が、私たち自らが信じ固める信心ではなく、阿弥陀仏の本願力が私に届いてできあがった「本願力回向の信心」（『注釈版聖典』信文類信一念釈251頁）であることを示しています。信心と本願力とは別ものではないのです。私たちが起こした信心であるならば、信心の白道は水火の煩惱に崩されてしまいうはずです。しかしそれが崩されず西岸まで続いているのは、信心が阿弥陀仏のはたらきに

よってできあがった心であるからです。親鸞聖人はこの何ものにも壊されることのない信心を「金剛の真心」（『注釈版聖典』信文類三一問答法義釈欲生釈244頁）と言われています。

東岸の人の声―教法

旅人が白道を進もうとした時に東岸から聞こえた「この道を行け」と勧める声（発遣）は、阿弥陀仏の救いを説く釈尊の「教え」をたとえたものです。善導大師はこれについて、「釈尊は入滅しておられてそのお姿を見ることはできないが、私たちは釈尊が残された教えを聞くことができる」と説明されています。その教えとは、具体的には『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』の「浄土三部経」です。

二河白道の多くは、「東岸の人の声」を西方を指さす釈尊のお姿によって表わしますが、本図では何も記されていない短冊が描かれています。この描写には、阿弥陀仏の本願に遭遇したことになった言葉は人それぞれであるから、「あなたが聞いた言葉を書き入れてほしい」という了祥師の思いが込められているのです。

西岸の人の声―弥陀の願意

西の岸から「この道を来たれ」と招き呼ぶ声（招喚）は、阿弥陀仏の本願（第十八願）のいわれ、すなわち「私にまかせよ、必ず救う」という阿弥陀仏の呼び声を表わしています。東岸の釈尊と西岸の阿弥陀仏の二尊が一致して私

たちに救いを与えることを「二尊一致（教）」と呼んでいます。

本図で描かれる阿弥陀仏は、お立ち姿で、光明を放っています。これは、善導大師が「二河白道のたとえ」の着想を得たとされる『観経』の「住立空中尊」（『注釈版聖典』仏説観無量寿経華座観98頁）を描いています。「住立空中尊」とは、釈尊が韋提希に「これからあなたに苦悩を除く法を説こう」と言われた時、突如、空中に姿を現し住まり立った、まばゆい光を放つ阿弥陀仏のことです。この立ち姿の阿弥陀仏は、釈尊の「苦悩を除く法を説く」という声に応じて現れた仏ですので、実は、「私にまかせよ、必ず救う」という阿弥陀仏の喚び声を表わしているのです。

そして阿弥陀仏から放たれる光明は、阿弥陀仏の徳を表現しています。「尽十方無礙光如来」とも呼ばれる仏さまです。本図で二河の隅々にまでいたる光明が描かれているのも、私たちが貪欲・瞋恚の煩惱をもったまま阿弥陀仏に救われていることを表現しているのです。一方、東岸の群賊のところにまで光が描かれていないのは、自力の行者が本願他力の救いを拒絶している様子を表わしています。

群賊―別解・別行・悪見

旅人を殺そうとした第一幅の「群賊・悪獣」は行者自身の「心と肉体」であり、言わば行者を内から惑わすものでしたが、ここで「そ

の道は危険だ、戻ってこい」と旅人を呼び戻そうとする「群賊」は、念仏の行者を外から惑わす者たちを表わしています。それは「凡夫の救いは方便であり真実ではない」「念仏だけで往生はできず迷いの世界を輪廻する」と念仏往生の教えを非難する、聖道門や自力で浄土に往生しようとする行者たちです。僧侶の姿で描かれる彼らは、第一幅では悪獣の後方に位置していましたが、本図では白道を行く旅人の近くに描かれ、ここでの「群賊」が自力の行者であることが示されています。

実は「群賊」の呼びかけは悪意から出たものではありません。彼らが信じる「善因善果・悪因悪果」の教えからすれば、嘘偽りのない、善意の呼びかけであるのです。しかしそれは、善人も悪人も平等に救う阿弥陀仏の本願の教えから見れば妄説であり、念仏の行者の行く手を阻むものであるのです。彼らは仏教者でありながらも「群賊」と言われているのです。

第一幅第二幅 補足

「水火二河」について

□西へ向かう旅人は、「突然」「忽然」として「火と水の河を見ます。これは、浄土往生（さとり）をめざすことによって、自らの持つ煩惱が「はじめて」私たちの問題となってくることを表わしています。往生浄土の教えを聞かないうちは私たちに自己中心性への深刻な反省

はないでしょう。むしろ自己中心的事であることは生きるためには必要であるとさえ考えられているのではないのでしょうか。しかし煩惱の絶え果てた清らかな浄土をめざす時、自らのあり方が間違ったもの、克服すべきものであることを突きつけられるのです。裏を返せば、自らの煩惱（水火二河）が見えてきたということは、浄土への道を歩み始めたということであり、自らを見つめる目が深くなったということでもあります。

□「百八煩惱」と言われるほどの多くの煩惱が説かれるなかで、特に貪欲と瞋恚が出されていることについて、『観経』に説かれる「王舎城の悲劇」を理由にあげる解釈があります。「王舎城の悲劇」は、「国（王）位を貪る」（『注釈版聖典』仏説観無量寿経発起序禁母縁88頁）阿闍世が父・頻婆娑羅王を殺害し、さらに父を救おうとした母・韋堤希に「怒り」（『注釈版聖典』仏説観無量寿経禁母縁88頁）、王宮の奥深くに幽閉した事件で、釈尊が『観経』を説くきっかけとなったものでした。『観経』は阿闍世の貪欲・瞋恚の煩惱をきっかけとして説かれた経典であるから、貪欲・瞋恚を抱えた凡夫が救いの対象であることを表わすために、「たとえ」においては特に二つの煩惱があげられているということです。

□「火の河」という表現に違和感を感じられた方もおられるかもしれません。この問題については、「火の坑が深く広くまるで河のようであ

るから」とか、「火炎が水流に似ているから」などと解釈されています。

□水火二河が「深くして底なし」といわれていることは、煩惱が果てしない過去世から私たちにそなわったものであり、人間の力ではどうやってもなくすことのできないものであることを意味しています。

「三定死」について

「三定死」とは旅人が直面した「引き返しても死ぬ、とどまっても死ぬ、進んでも死ぬ」という状況です。譬喩には、「南や北へ逃げ去ろうとすれば、恐ろしい悪獣や毒虫が先を争ってわたしに向かってくる」とありますので、厳密には、旅人は「四定死」の状況に置かれていることとなります。第一幅において旅人の左右（南北）から悪獣が迫っているのは、この状況を描いたといえるでしょう。

四定死の状況は、①引き返す：聖道門の修行、②とどまる：人・天の境界にとどまる、③進：西方浄土への自力往生（本願を疑う自力心）、④南北に逃げる：阿弥陀仏以外の諸仏の浄土への往生、と解釈されています。譬喩における「死」とは、「流転輪廻」を意味しますので、四（三）定死とは、自らの身心と煩惱にさいなまれている私たちは自力修行によって流転輪廻から逃れられないことを示しています。

「白道」について

□親鸞聖人は「本願力」を意味する白道を「無上の大道」（『注釈版聖典』信文類三―問答法義釈欲生釈244頁）と示されています。ところが、はじめに旅人が見た白道はきわめて狭い道でした。これは行者が大道である白道を小路と見誤ってしまっていること、すなわち本願他力の教えを聞きながら自力の教えと聞き損じていることを表わします。すべての者が救われる教え（大道）を聞きながら、限られた者しか救われない難しい教え（狭い）と取り誤り絶望する。「三定死」の③本願疑惑はこの状況に相当します。

□「白道」の西岸までの長さ「百歩」を、親鸞聖人は人の一生をたとえたものであると言われます（『注釈版聖典』愚禿鈔二河白道釈536頁）。白道の長さと水火二河の長さが同じであるということは、聖人が、「臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり」（『注釈版聖典』一念多念証文693頁）と言われるように、煩惱が生涯絶えないことを意味しています。また、白道が「信心」であることに注目すると、白道の長さとは、信心を得てから臨終に至るまでの生涯となり、煩惱をもったままの救いが表わされていると味わうことができるでしょう。

□信心の人にも煩惱がおこるということは、白道に波浪と火炎がかかるように描かれていると

ころにも表現されています。これに関して有り難いお話が残されています。

昔、浄土宗の教山和尚という方が、新たに描いた二河白道図を真宗の学僧・恵空師（1644-1721）にお見せしたところ、恵空師はこう仰いました。「白道一字を引くが如く鮮明にして毫（いささか）も水火に侵（おかさ）さるるところが見えませぬ。和尚の信念果たしてこの図の通りでござるか。余においては中間の白道は常に貪瞋水火の相撃つところとなる。しかも願心の白道いさかも破壊するところなし。願力住持して西方にいたらしめたまうのみ。善導のおんころ亦然らざるを得んや」（藤秀琿『二河白道と人間』132頁）。

第三幅 浄土に生まれる

第三幅は、白道を歩んだ旅人が西の岸に到り、善き友に会うことができた場面です。



西の岸に到る―かの国に生ずる

旅人が西の岸に到ることは、他力念仏の行者が命終えて浄土に生まれることを表わしています。

す。

第二幅の阿弥陀仏のお姿は、この世に現れた姿を表すお立ち姿でしたが、浄土での様子を描く本図では、阿弥陀仏は蓮台に座しておられます。その前に描かれるのが、浄土に往生した行者です。阿弥陀仏と同じ仏の姿に描かれているのは、浄土往生の後、長い修行の末に成仏するのではなく、往生すればただちに阿弥陀仏と同一の仏果を得るという親鸞聖人の「往生則成仏」の教えを表現しています。聖人は「二河にはさまれた一すじの白道すなわち本願のはたらきの中を一步二歩と少しづつ歩いていくなら、（中略）必ず浄土に往生することができ。そうすれば、浄土のさとりの花に生れ、阿弥陀如来と同じく、この上ないさとりを開かせていただくのである」とお示しくださっています。本図はまさにこのお示しを表現したものです。東岸の群賊・悪獣や水火二河が描かれていないのは、仏となりさまざまなわざわいを永久に離れたことを表わしています。

そして阿弥陀仏の周りに多くの聖衆が描かれているのは、浄土がすでに先立ち仏となられた懐かしい方たちと再会することができる「俱会一处」の世界であることを示しています。

『季刊せいてん No.128』より抜粋

尚、どの図にも描かれていないのですが、善導大師は「二河白道」の譬えの解説の最後に、彼岸に往生したら、生死のこの世界に還り、大悲を起こして、衆生を教化することを述べておられます。

東京教区総代世話人一日研修会

去る九月八日（日）午前十時より、築地本願寺第二伝道会館「蓮華殿」で、東京教区内寺院の門徒総代さん・世話人さんが一三三名お集まりになりました。

当寺から安達光成さん、早崎光弘さんがご出席になりました。

午後三時過ぎ終了予定でしたが、台風が近づいているとのことで、午後二時半には終了すると冒頭の教務所長のご挨拶にありました。

おつとめは、門徒総代さんで、正信偈・六首引き和讃を巡讀しました。

藤本真教師（茨城東組常教寺ご住職）に「社会の変化とお寺」と題して、ご講義いただきました。

社会・家庭環境、人権の拡大、価値の多様化、皆が同質な生活ができるから皆と違っている権利、企業の目的が、利潤の追求から社会貢献に変わってきている等々。その中で、お寺のあり方も変わってきている。後半は、「十年後あなたのお寺はどうなっているか」ということを四、五人で語ってみてくださいというところで、私は関を外しました。講



社会・家庭環境、人権の拡大、価値の多様化、皆が同質な生活ができるから皆と違っている権利、企業の目的が、利潤の追求から社会貢献に変わってきている等々。その中で、お寺のあり方も変わってきている。後半は、「十年後あなたのお寺はどうなっているか」ということを四、五人で語ってみてくださいというところで、私は関を外しました。講



師のまとめで、各々出されたことをピックアップしてください。十年後と言わず、数年後には、当寺は宗教法人を取得しておきたいと、門徒さんも願っておられることだらうし、その

期待に応えねばならないと思いました。

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

九月十八日（水）、千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要に参拝しました。

お天気は何とか持ち堪えました。専らご門主様のご臨席のもと、厳かに行われました。

全国から多くの門信徒さんもお参拝でありました。

全国で平和の鐘が、世の中安穏なれ、仏法ひろまれと響いたことです。



全国で平和の鐘が、世の中安穏なれ、仏法ひろまれと響いたことです。

第二回 門徒総代会

秋季彼岸会法要の日、午後一時から、門徒総代さんにお集まりいただき、門徒総代さんの任期が来年（二〇二〇年）三月三十一日までであることをお話ししたし、次期門徒総代さんを決めていかなければならないことを報告させていただきました。

また、宗教法人の取得にあたって、現在本願寺から一千万円借入しております。土地建物の抵当権は外れたのですが、月々、四万五千円程、二十年間の返済計画を立てて、都庁・宗教法人担当部署を訪ねたところ、返済期間が長いことを指摘されたことを説明させていただきました。

そこで、二十年を五年に短縮した計画を立て、門徒総代さんのご意見をお聞きしました。まだ、協議の途中ではございますが、次の門徒総代会（報恩講）にて決定して、皆さまにご報告できたらと思っております。



二〇二三年には、ご本山で、親鸞聖人御誕生八五〇年・立教開宗八〇〇年慶讃法要もあります。当寺の宗教法人設立が時同じくなるように、ご縁の皆さまにご協力いただきますよう宜しくお願い致します。

稱讃寺 行事予定

二〇一九年一〇月の行事予定



六日(日) 日曜礼拝 午前九時

のんのん法話会 午後二時

一三日(日) 日曜礼拝 休座

一六日(木) のんのん法話会 午後二時

二〇日(日) 日曜礼拝 午前九時

二六日(土) のんのん法話会 休座

※申し訳ありませんが、

七日(月)～十一日(金)

並びに

二十五日(金)～二十八日(月)

までお寺を留守にいたします。

とらわれなひとは

にぎ

握りしめなひこと

二〇一九年「心のともしび」十月カレンダーより

二〇一九年 十一月の行事予定

三日(日) 日曜礼拝 休座

六日(水) のんのん法話会 午後二時

一〇日(日) 日曜礼拝 午前九時

一六日(土) のんのん法話会 休座

一七日(日) 日曜礼拝 休座

のんのん法話会 午後二時

二四日(日) 日曜礼拝 休座

二六日(火) のんのん法話会 午後二時

※十一日(月)～十六日(土)まで、築地本願寺宗祖報恩講に出向しております。

二〇一九年 十二月の行事予定

一日(日) 日曜礼拝 休座

六日(金) のんのん法話会 午後二時

八日(日) 日曜礼拝 午前九時

一五日(日) 宗祖親鸞聖人報恩講 正午

一六日(月) のんのん法話会 午後二時

二二日(日) 日曜礼拝 午前九時

二六日(木) のんのん法話会 午後二時

二九日(日) 日曜礼拝 午前九時

二〇一九年一〇月 法務・布教・出向予定

三日(木) 坂根家月忌参り 九時半

五日(土) 中山家一周忌(所沢) 一〇時

六日(日) 安田家三十五日法要 二時

のんのん法話会 一四時

一三日(日) 東組一樹寺報恩講出講 一〇時

長田家一周忌法要 一五時

一四日(月) 高橋家法事(所沢) 二時

一九日(土) 濱田家一周忌法要 一〇時半

東組浄雲寺報恩講出仕 一三時

二〇日(日) 東組永稱寺報恩講出仕 二時

澤井家お参り 一六時

二六日(土)～二七日(日)

鹿児島・稱讃寺永代経法要

*七日(月)～十一日(金)並びに二十五日午後より二十八日(月)は、お寺を留守いたしますことをご了承ください。